

ポプラの水滴

渡 辺 啓 吾

改良ポプラの並木が林業試験場の構内にある。植えてから11年で、太いものは直径が40cmくらいある。だが、土地を選ぶ木で、並木路の坂の上方の乾燥気味の瘠せた土壌では、直径は10cmくらいしかない。昨年はこの並木で二つのことを知見した。4月下旬に、この並木がまだ裸木のとき、ほとんどの梢に小鳥の群がとまったように雄花がついた。路に落ちていたのを見ると、赤黒い太い毛虫のようなものだ。改良ポプラはさし木で増殖して、親の性質がそっくりうけつがれるが、雌雄異株だから、一つの品種はどちらかの性のものとなる。雄花ばかりつけた太い裸木がずらりと並ぶのは異様な迫力だ。

もう一つは5月下旬のこと。快晴の午後6時頃、この並木路を下っていると、美唄平野のかなたに落ちる西日が、ゆれるポプラの大きな葉を輝かして、価千金のひとときを演じていたが、数本の木の樹冠から、虫が地面に飛ぶような、白糸の筋がチラチラと目についた。近づく虫ではなくて、樹冠から水滴が落ちているのだった。この話を同僚にしたら、勤め帰りの6時頃、場外の舗装道路のポプラ並木の下にも水滴のあとがあったという。別な同僚は、あるとき木の下に車を停めておいて朝方に見たら、木の下のところはぬれていたが、木から外れた部分はぬれていなかったという。ポプラの水滴は並木路の坂の下の伸びのいい、葉の多いものに見られた現象だが、坂の上の細い幹の、葉の少ないものにはこの現象は見られなかった。水滴の多いのは生活量の多いことを示すものにちがいない。

さて、いま日本は需要の65%に当る木材を60数カ国から輸入しているが、輸入先国の風向によっては、輸入が減少して、国内増伐が要請される時がくるかもしれない。その時には再び短伐期林業が宣伝されることであろう。短伐期用改良ポプラ開発の本家イタリアでは、古くからこれが量産材になっているようだが、日本での改良ポプラ造林は試行中で、問題をかかえているようである。最近の短伐期林業の動きにこんなものがある。昨年、林学会道支部での千葉王子林木育種研究所長のお話では、日本のバルブ会社10社が共同出資して、年4万haのユーカリ造林をブラジルに計画し、7年生でha当り150 m³の収穫を期待しているとあった。北海道での短伐期林業プランは如何。

改良ポプラの育種にヨーロッパは百年を要したと聞くと、ポプラ並木の水滴も、時代の期待へのけなげな汗とも思えて、今春はよく観察して、ポプラと話してみたいと思っている。

(副場長)